

『ヒューム主義』の功罪」を論じるために

--- いま「ヒューム主義」はどのようなものとして論じられているか ---

林 誓雄 (京都大学)

現代メタ倫理学の議論の深化にとっては、ヒューム自身の議論がどうなっているのかという問題は特に検討すべき問題ではないのかもしれない。しかし逆に、ヒューム研究を行なう場合には、現代メタ倫理学の議論に対してどのようなスタンスをとるのかは大きな問題である。メタ倫理的ヒューム主義がヒューム自身の見解からずいぶんと外れたところに行ってしまうにせよ、ヒュームの名がついている以上、その議論をフォローアップし、ヒューム研究に反映させることも考慮に入れなければならない。

また、他方で、メタ倫理学の論争が、デフォルメ化された図式をスタート地点として、それに対する反論と対案提示という形で展開されていき、やがて、細かい揚げ足取り的相互批判を通じて袋小路に行き当たってしまう可能性がないわけではない。そのとき、その原因をスタート地点で削ぎ落としすぎた理論的な広がり求め、論争を仕切り直すことが必要となるかもしれない。そこで効力を発揮するのは、たとえば、デフォルメ化される以前のヒューム哲学であってもおかしくはないだろう。(奥田太郎[2004]pp.1-2)

はじめに

「ヒューム主義」とは何であるのかということを考えてとき、その手がかりとして、手始めに大庭健 編『現代倫理学事典』[2006]を繙いてみた。そこでは「ヒューム主義」という言葉を、3カ所で(しか?)見つけることができる。

動機/動機づけ by成田和信

「どのような心的事象が動機づけの力を持つか(動機になりえるか)」という問題をめぐって

ヒューム主義「あらゆる行為の動機づけの源泉は(欲求のような)非認知的な心的事象にあり、したがって、思慮、認識、信念といった(理性による)認知的な心的事象だけでは動機づけは生じない」

反ヒューム主義「認知的な心的事象が源泉となる動機づけも存在し、道徳的動機づけはその典型である」(ネーゲル、ダーウオル、コースガード、マクダウェル)

「道德判断の認知性」をめぐって

内在主義を前提にすれば、

ヒューム主義「道德判断は道德的事実を述べているのではなく、判断者の非認知的な態度の表明である」⇒非認知主義を後押し

反ヒューム主義「道德判断は、道德的な事実を記述している」⇒認知主義を後押し

道德心理学 by成田和信

「動機づけの源泉は何か」という問題をめぐって

ヒューム主義「あらゆる動機づけの源泉は欲求にある」

カント主義「理性だけが源泉になる動機づけもあり、道德的動機づけはその典型である」

内在主義と外在主義(行為の理由に関する) by成田和信

行為の動機づけに関するヒューム主義(ウィリアムズ流)

ヒューム主義「行為の動機づけの源泉は行為者の”動機群”にある」

「ある事柄が A を行なうことの正当化理由になる」という考慮が S を A へと動機づけるためには、S が「A は自分の動機群と合理的な仕方で(たとえば、A が自分の動機群のメンバーを満たす手段になるという仕方で)結びついている」という信念を持っていなければならない。...このヒューム主義と内在主義を前提にすると、「S が A を行なうことの正当化理由がある」と言えるためには、S が「A は自分の動機群と合理的な仕方で結びついている」という信念を持っていなければならない、という結論が出てくる。この結論に、S のその信念が正しいという条件を加えれば、正当化理由に関する次のような見解がえられる。「S が A を行なうことの正当化理由がある」と言えるためには、A は S の動機群と合理的な仕方で結びついていなければならない。

奥田[2009]を参照すると現代倫理学における「ヒューム主義」に関わる主要な論争系統は

[1]道德的な行為の動機づけに関わる論争

[2]道德判断の認知性に関わる論争

を挙げることができ、これに R. コーホン[2008]で言われていることを加えるなら

[3]Is-Ought Gap に関わる論争

を含めた三つの系統にまとめることができる。

奥田[2009]の指摘によると、これら 3 つの系統のうち、現在、倫理学において明確に「ヒューム主義」として論じられ続けているのは[1]の系。そしてその系は現在、M. シュレーダー[2007]による「理由のヒューム主義」として展開されている。

※この「理由のヒューム主義」を、後に紹介する Sandis[2009]は斥ける。

今回の報告にあたり目を通した論稿の多くは、[1]と[2]に関するものであった([3]については、そのテーマに特化した論稿集 Charles Pigden ed., *Hume, 'is', and 'ought': New Essays* が今年 5 月に刊行予定)。以下では、それらの論稿で論じられていることを概観しながら、今現在「ヒューム主義」とはどのようなものとして捉えられているのかということを浮き彫りにするための準備作業を行なう。

なお、今回は主に C. Pigden 編集[2009]による *Hume on Motivation and Virtue* 中の 4 つの論稿をまとめたが、その他に「ヒューム主義」を扱ったものとして、E. Millgram[1995] “Was Hume a Humean?”、と Karlsson[2006] “Reason, Passion, and the influencing Motives of Will”との 2 論稿を付け加えた。

Millgram, E. [1995] “Was Hume a Humean?,” in *Hume Studies*, Vol.XXI, No. 1, pp.75-93

- ・実践的推理 practical reasoning について語るとき、「ヒューム主義」は「道具主義」と同義とされる。
 - ・実践的推理に関する「ヒューム主義」的見解に基づく、先行して与えられている欲求を満たすことへと向けられる手段-目的推理のみが、実践的推理と見なされることになる(この考え方は、Smith, M.[1987], Lewis, D.[1988])。
 - ・だがミルグラムは、「ヒュームの名を道具主義とリンクさせることは不適切」と主張。
-

【「ヒューム主義」＝「道具主義」???】

「ヒューム主義」ということで引き合いに出されるのは「理性は情念の奴隷」の箇所

《理性(手段-目的 関係の発見・指摘)》+《欲求》⇒ 行為

でも、もう一度よく考えてみる。「理性は情念の奴隷」議論は二つの議論の結論として提出されていた。

ひとつ目

- 1：知性は二つの異なる仕方で働く。いわゆる分析と総合。
- 2：分析的推理は、我々の行動に決して影響を及ぼすことはない。
⇒ 分析的推理それ自体は、実践的結論を生まない。
- 3：総合的推理それ自体は、実践的結論を生まない。
- 4：それゆえ、理性単独では、いかなる行動も生みえない。つまり、推理は実践的結論を生まない。

この議論の結論は、「あらゆる実践的推理が道具的である」というのではなく、「実践的推理なるものがそもそも存在しない」ということ。

ふたつ目

- 1：情念は原初的存在。原初的とは表象的と反対のこと。
⇒情念は表象的なものではない。
- 2：真と偽とは、表象作用を必要とする。
⇒情念は真や偽ではありえない。
- 3：理性はそれ自体、真と偽のみに関わっている。
- 4：それゆえ、情念は理性に反対ではありえない。精神の実践的な状態が、推理によって生み出されることはありえない。

二つ目の結論も、実践的推理なるものが存在しないという主張。二つの議論が両方ともに、同じ結論に収斂。

- ・道具主義者は、ある種の実践的推理(=手段-目的推理)が存在すると考える。
- ・しかし、ヒュームが考えているのはむしろ、実践的推理の正当な形式は存在しないということ。
- ・よって、ヒュームは道具主義者ではない。(Cf. 「ヒュームは実践的推理について懐疑論者」 by コースガード[1986])

【実践的推理についての懐疑論とその理由】

- ・ヒュームが実践的推理について懐疑論をとる理由は、彼の「意味論(知覚論)」にある。
- ・彼が自分の「意味論」を背景としているからこそ、理性の役割が分析と総合の二つのみ、という極端な前提が提出される(**第三の推理として実践的推理が存在する可能性を潰す**)。
- ・ヒュームの意味論とは、現代のそれとは異なり、観念論のこと。
- ・知覚の種類を区別するもの = 活気 vivacity … だけでは不十分
⇒ **表象性** representationality(心的状態が表象的であること)
- ・表象性によって、心的状態は《内容を持つもの》と、《動機づけの力を持つもの》に分けられる(両方持っているものはない)。信念-欲求理論の祖。
- ・ひとたび動機づけの力を持つ心的状態(=情念)が、内容を持たないものとして理解されたら、「情念が理性の対象ではない」ということは当たり前。
- ・そして推理とは、内容を持つ心的状態のみを操作するだけのものということになる。

【ヒュームに実践的推理に関する道具主義を帰す理由】

- ・「理性は情念の奴隷」といった箇所を理解するにあたり、ヒュームの意味論が議論の背景をなしているということが取りこぼされていた。
- ・意味論を背景にすれば、ヒュームは道具主義を主張しているのではなく、実践的推理について懐疑論を主張していることが分かる。
- ・さらに言えば、現代においてはヒュームの意味論(観念論)が受け容れられることなどないだろうけれど、意味論を斥けておきながら、その意味論を出発点として成り立っている議論を、わがものとして用いてよいと考えるべきではない！

コメント

- ・ここで批判されていた「ヒューム主義」は、実践的推理に関する「道具主義」
- ・実践的な理性の働きというものにヒュームは懐疑的だ、という大きな流れには共感。
- ・そのためか(あるいはこの論稿が有効打となって?)、「道具主義」という意味での「ヒューム主義」は、今では姿を消しつつあるような気がする。
- ・興味深いのは、ヒュームの議論から哲学・倫理学に役立ちそうなものを抽出し、それに「ヒューム主義」という名を冠して用いたいならば、ヒュームのその議論を下支えしている基礎的議論をも踏襲せねばならないとミルグラムが主張している点。この点は、冒頭の奥田の指摘に通じる?だが、果たして妥当?

Pigden, C. R., [2009] "If Not Non-Cognitivism, Then What?," in *Hume on Motivation and Virtue*, ed. by Pigden, C. R., Palgrave Macmillan.

- ・ ヒュームは、非認知主義を主張していない(だからと言って認知主義だと言っているわけでもない)。
 - ・ ヒュームを、「判断の外在主義」として解釈。
 - ・ ヒュームに由来するとされる「動機づけ議論 the Motivation Argument」は、そのいくつかの前提に問題があり、また議論全体が論点先取の虚偽を犯しているので失敗している。
 - ・ Pigden 流の修正版「動機づけ議論」というものが提出されるが、それでもその議論は失敗している。
 - ・ 結論として、ヒューム主義的動機づけ議論を不支持。
-

【ヒュームは、非認知主義ではない】

F・ハチスンがセイヤーマッコードによると、道徳実在論者。またハチスンは、道徳判断が真理適合的 truth-apt と信じていた。しかし、ハチスンは強い意味での道徳実在論者ではない。なぜなら、ハチスンは、道徳的事実が心から独立的であるとは信じていなかったから。ハチスンにとっての道徳特性とは、二次性質と同種。今の言葉で、反応-依存的 response-dependent。

ヒュームはこの点でハチスンに同意。ハチスンが非認知主義者ではないので、ヒュームも非認知主義者ではない。ところで、「正しさ」が「赤さ」に似ているのだとすれば、なぜわれわれは、我々が「このバラは赤い」から「この行為は正しい」へ移るときに、真理適合性を手放すべきなのか？色に関してヒュームに非認知主義を帰さないのなら、ヒュームに徳と悪徳に関する非認知主義を帰す理由はない。

【ヒュームの動機づけ議論は失敗作】

まず、非認知主義的解釈を見る。

前提(1)「人々はしばしば自分たちの義務に支配されている」

前提(2)「理性は情念の奴隷である」

動機づけにおいて理性は完全に無能力。信念それ自体は動機づけえない。

かくして、以下の結論を得る。

- ・ 道徳的「信念」は、真正の genuine、理性の産物である信念とは異なる仕方で動機づける。
- ・ このことから、道徳的「信念」は真正の信念ではないことになり、道徳的「信念」を表出する判断は真正の命題ではないということになる。

動機づけ議論：非認知主義バージョン

- (1')道徳的信念は、単独で、しばしば動機づける。
- (2')真正の信念は、単独では動機づけえない。
- (3a)(1')と(2')のベストな説明は、道徳的信念が真正の信念ではないということ。
- それゆえ、
- (3')道徳的信念は真正の信念ではない。
- (4')(3')のベストな説明は、最適な非認知主義的理論を挿入すること。
- それゆえ
- (5)最適な非認知主義的理論の挿入

問題点

いくつかの前提に問題がある

(1')道徳的信念は、単独でしばしば動機づける. (3.7)

ヒュームは、道徳的信念が欲求の助けを借りて動機づけることは示しているが、それでは不十分。
道徳的信念が「単独で」動機づける(=信念内在主義)ということを証明せねばならないのに、そのような議論はない。

(2')真正の信念は単独では動機づけえない. (3.11)

ホッブズとラッセルの自伝に書かれた反例(数学的信念それ自体によって、欲求の助けを借りる必要なく動機づけられるという話)によって、反証されてしまう。

議論全体が論点先取

議論の依存関係として、

「理性は情念の奴隷」テーゼ → 「動機づけ議論」

しかし、理性の奴隷性議論(i)「すべての真正の信念は、分析的か、総合的」は、すでに「道徳的『信念』は真正の信念ではない(証明すべきこと)」を前提している。

[裏前提] 道徳的「信念」には動機づけの力がある。真正の信念にはない。

[裏前提] 道徳的「信念」と、真正の信念とは、別のカテゴリー。

(i)真正の信念は分析的か総合的なもの

そのどちらにも道徳的「信念」は入らない[当たり前]

(v)真正の信念は、動機づけの点で完全に無能力[当たり前]。

∴「道徳的区別は、理性に由来しない」⇒【非認知主義】

それゆえ、論点先取された議論から導きだされる結論、すなわち「道徳的区別は、理性に由来しない」は妥当ではない。

【非認知主義的解釈の手法】

[1]理性＝信念形成機能

[2]真正の信念＝理性の産物としての信念。

← 理性によってしか、信念は形成されない！

∴道徳的信念とは「信念」ではない。⇒非認知主義

しかし上で見たように、非認知主義解釈では、動機づけ議論が失敗しているということになった。

そこで...

【ピグデンの修正】

[1']理性≠信念形成機能

理性＝信念を獲得するときに用いられるメカニズムのひとつ(に過ぎない)

信念＝《理性に由来する信念》および《印象に由来する信念》

《理性の奴隷性議論を修正》

⇒結論は、「理性に由来する信念は、それ自体では動機づけえない」

《動機づけ議論を修正》

⇒結論は、「道徳的『信念』は、印象(とりわけ是認と否認の感情)に基づく」

【判断と動機づけの外在主義】

「道徳的『信念』が、それ自体で動機づけることができる」の意味は、
行為が引き起こされるとき、信念それ自体が欲求を刺激しているのではなく、われわれが
その信念を形成しているときに感じる快苦の印象が、欲求を刺激している。

(=この点については、拙稿 林[2009]と同じ)

【動機づけ議論の修正(最終版)】

(1'')道徳的考慮は、しばしば単独で動機づける。

←事前に存在するよいものへ向かう気質 disposition が前提されているから偽

(2'')理性由来の信念は単独では動機づけ得ない。

←これを引き出す理性の奴隷性議論は、論点先取の虚偽を犯している。また、現実に反例がある(ホッブズとラッセル)ので偽

(3a'')(1'')と(2'')のベストな説明は、道徳的考慮が理性に由来しない信念であるということ。

それゆえおそらく、

(3'')道徳的考慮は理性由来の信念ではない。

(3b)道徳的信念は、道徳的考慮そのものであるか、それとも道徳的考慮に基づいている。

(3c)道徳的信念は、理性に由来する信念ではない。

(4'')あらゆる信念は、観念に基づいている(理性/思考)か、印象に基づいている(感覚/感じ)かのどちらかである。

(5'')それゆえ、道徳的信念は、印象[とりわけ是認と否認の感情]に基づいている。

∴「道徳的区別は理性に由来しない」

⇒ 上記の議論の前提には問題があり、また上記の議論を下支えする「理性の奴隷性議論」が論点先取の虚偽を犯しているので、ヒュームの動機づけの議論は完全に失敗作。

コメント

- ・ここでの「ヒューム主義」は、認知/非認知主義の議論とヒュームの動機づけ議論の両方に関係。
- ・全体を通して、「理性に由来する」「印象に基づく」という意味が不明(ヒューム自身もそうだが)。
- ・「ヒュームの動機づけ議論はどう修正したところで失敗だ」という結論には検討が必要？例えば、ミルグラムの結論を思い出せば、『本性論』第一巻や第二巻で論じられていることを入れ込むことで、ヒュームの動機づけ議論を論点先取の虚偽をおかしていないものとして提出し直すことができるかも？
- ・ただし、「(2'')理性由来の信念が単独では動機づけられない」に対する反例が妥当なものであるなら、ヒュームの動機づけ議論は失敗していると言えるような気もする。

Smith, M. [2009] “The Motivation Argument for Non-Cognitivism,” in *Hume on Motivation and Virtue*, ed. by Pigden, C. R., Palgrave Macmillan.

-
- ・ ヒュームの議論を、非認知主義として読み、ヒュームは判断の内在主義にコミットしていると解釈。
 - ・ 非認知主義かつ判断の内在主義として読むのであれば、ヒュームの議論に対し、ヒュームには見られない「実践上の合理性」概念を組み込まねばならない。
 - ・ ピグデンの議論に応答しながら、ヒューム主義的(非認知主義的)動機づけ議論を支持。
-
- ・ ヒュームは**非認知主義**を支持するものとしてしばしば引き合いに出される。

(1) 行為とは、《事物のあるべき姿についての行為者の欲求》と、《事物をそのようにするために行為者がなすことのできることにについての行為者の信念》との産物である。

(2) 人々は一般的に、自分の道徳的見解 moral view に従って行為する。

(3) 人々が一般的に、自分の道徳的見解に従って行為するという事は、
道徳的見解をもつということが、事物のあり方についての信念を持つことであるだけならば、説明は困難だろうけれど、
道徳的見解をもつということが、事物のあるべき姿についての欲求を持つことであるのならば、説明は容易であろう。

それゆえ：

(4) 道徳的見解を持つということは、欲求を持つことである。**[非認知主義的]**

- ・ (2)は「**判断の内在主義**¹」へのコミットメントを示している。
- ・ この判断の内在主義をヒュームに帰すのであれば、ヒュームの動機づけ議論に、「**実践的合理性** practical rationality」という要素を入れ込む必要が出てくる。

⇒ 再定式化

「人々が実践的に合理的である限り、人々が道徳的見解に従って動機づけられるというのは概念的に真である。」

¹ 『現代倫理学事典』大庭健

【道徳判断についての内在主義】道徳判断のうちにはそれ自身、行為を導く動機づけが含まれている。

【道徳判断についての外在主義】道徳判断とそれに関わる行為の動機づけとは互いに独立のものであり、動機づけのためには判断とは別に欲求その他の働きが必要である。

Darwall[1995] *The British Moralists*.

【判断の内在主義】ある判断(「XはAすべきである」)が道徳判断であるためには、判断を下した人が適切な状況下(Xと同じ状況下)におかれた時、そうする(Aする)よう動機づけられていることが必要である。

【存在の内在主義】ある道徳判断(「XはAすべきである」)が真であるためには、実際にXがAするよう動機づけられていることが必要である。

問題点

判断の内在主義と読めることをヒュームは言っているが、それを明確に示すテキスト上の証拠が見つからない。つまり、上のように結論するためには、ヒュームのテキストを越えねばならない。

・しかしながら、ヒュームの中には「実践的合理性」など存在しないとよく言われている(e.g., Millgram[1995]etc. コースガードに言わせれば、ヒュームは実践的推論というものについて懐疑論者だった(Korsgaard[1986]))。

それでもスミスは、動機づけの議論とは、冒頭に引用した文章においてヒュームが唱道している議論を、**最善の仕方**で**合理的に再構成**したものである、と考える。そして、ヒュームを非認知主義者と想定した上で、動機づけの議論そのものの妥当性を吟味する。

【そもそも「認知主義/非認知主義」とは？²】

認知主義者：道徳的見解をもつというのは、一群の道徳的信念をもつということ。われわれは、行為者の道徳的信念を、彼の欲求による構成物という観点から説明できない。

非認知主義者：道徳的信念が全く存在しないことを否定する。

信念は二つの別個のカテゴリーに分類されると主張する。

欲求によって構成される道徳的信念。

欲求によって構成されない非道徳的な信念。

² Botros, S. [2006] Hume, Reason and Morality, Routledge, pp.225-6

[Cognitivism]

道徳判断とは、それが真であるためには現前せねばならないある行為がもつ所与の客観的特性についての信念である、という見解。The view that moral judgements are beliefs about a given objective property of an action on whose presence their truth depends.

[Non-cognitivism]

道徳判断とは信念ではなく、情感や欲求を表出することであるという見解。The view that moral judgements are expressions of feeling or desire, not belief.

【非認知主義】by大庭健

表出主義---情動主義

---指令主義

- ・道徳判断は、事態の認知には関わらない。
- ・認知すべき道徳的事実はない。
- ・道徳判断は通常の意味での真値を持たず、通常の意味での判断ではない。

【認知主義】

善悪や正邪は、「黑白」「乾湿」と同じで、対象の道徳的特性を描写しており、道徳判断は、対象がそうした特性を帯びているということの認知による。

Sandis[2009]p.147

通常ヒュームに帰される形式の非認知主義は、道徳判断とは我々の欲求の表出であるという主張である(Cf. Blackburn[1996],p.180)

ピグデンを批判

ピグデンの議論では、ヒュームの言う規範的信念は、欲求によって構成されるものということになる。そして、上記の定義に従えば、**非認知主義者に特徴的な見解は、規範的信念が欲求により構成されるということだった**から、ヒュームの道徳的信念の説明に対するピグデンの解釈は、彼の主張とは裏腹に非認知主義的解釈ということになる。

【ヒュームの動機づけ議論は成功しているのか？】

ヒューム流の**非認知主義**と、ピグデン流の**認知主義**とどちらがよりよいか？について検討することで結論を出すことにする。

非認知主義

道徳判断＝一般的観点に立つときに感じる是認・否認の態度の承認。

よって、道徳的見解を持つ＝二階の欲求をもつこと

e.g., 関連する状況のもとに仮に我々があるとしたら抱くであろう是認・否認の態度に対する是認の態度をとること

⇒ 判断の内在主義を説明できる非認知主義者としてヒュームを解釈するために、ヒュームの見解を合理的に再構成する。

認知主義：ピグデンのヒューム批判

・ヒューム由来の動機づけ議論：信念は、新たな欲求を引き起こさない(因果的な力はない)。

⇒ 印象由来の道徳的信念であれば、単独で新たな欲求を引き起こしうる。

⇒ さらに、ラッセルやホッブズの事例から、新たな欲求を生み出す信念が、道徳的信念以外にも数多くあるということが示される。

∴ 「道徳的信念がそのような因果的な力を失っている」と想定するヒュームの非認知主義的動機づけ議論は間違い！

ピグデン批判

・ピグデンが、道徳的信念は新たな欲求を引き起こしうること、およびその仕方を、特定の因果的気質を指摘することによって説明したところまでは正しかった。

・しかし、スミスによれば、もう一步踏み込んで、実践上の合理性を組み込まねば、ピグ

デンの認知主義的動機づけ論は妥当性を欠いたまま。

・ピグデンが示したのは「人々が、特定の道徳的信念を獲得するとき、新たな欲求を獲得する気質をもつという事実」まで。しかしそれでは不十分で、人々が実践的に合理的である限り、道徳的見解に従って、人々がなぜ動機づけられるのか、ということまで説明せねばならない。**そうでなければ、動機づけ議論における判断の内在主義にはならない。**

・つまり、**ピグデンが、判断の内在主義を奉じる認知主義的動機づけ議論を主張したいのであれば、道徳判断を下すことと動機づけられることとの間にあるはずの「実践的な合理性」**というものを組み入れなければならない(にもかかわらずピグデンはその作業をやっていない)。

・ラッセルは、ユークリッドを学んでも数学への愛が生じず、他方ホッブズはそれが生じるからといって、ラッセルが実践上不合理であり、ホッブズが実践上合理的ということにはならない。

結論

ヒュームの見解：

欲求によって構成されていない信念[理性由来の信念]は、新たな欲求と、**因果的で合理化する関係にはない**けれど、道徳的信念は、新たな欲求と、そのような**因果的で合理化する関係にある**。

⇒ 道徳的信念は欲求によって構成される[**非認知主義**]。

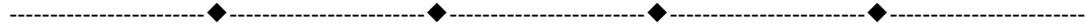
コメント

・そもそも「判断の内在主義」をヒュームが採用しているかどうかが論点。それを前提してしまうのは不適當？(Cf. 拙稿 林[2009])

・ピグデンを批判する下りで、ピグデンも「道徳的信念が欲求により構成される」と考えているから非認知主義だという批判はなんだか変。「欲求によって構成される」の意味が曖昧なので、スミスによいようにとれてしまう。ヒュームの知覚論を前提にして、印象といった感覚的知覚に由来する信念(それでもその信念は「真正の信念」と言いうる)という意味なのか、それとも「道徳的信念」という名を冠しながらも、「真正の信念」ではなく「欲求によって構成されているもの」という意味(これはピグデンが批判した対象であった)なのかが定かではない。結局、「認知/非認知主義」の定義が、スミスにとって都合の良いものであり、ピグデンがその定義に同意しているかどうか分からない点(おそらく同意しない)、最大の

問題と思われる。

・ピグデンは明らかにヒュームを「判断の外在主義」と解釈していた。よって、ピグデンは判断の内在主義を奉じる道徳認知主義としてヒュームを解釈しようとしていないから、スミスの批判は不当である。ピグデンは外在主義的解釈なのだから、スミスが主張する「実践的な合理性」なるものについて考慮する必要がない。



Cf. 奥田[2004]で紹介されていたスミスの「ヒューム主義」と「反ヒューム主義」

ヒューム主義

動機づける理由に関して、信念-欲求理論を受け容れ、「世界を適合させる状態」である欲求によって、行為者は動機づけられる。

反ヒューム主義

規範的な理由に関して、欲求はそれ自体として合理的な批判を免れてはいない。というのも、傾向性 disposition として理解される欲求は、信念の要素を必要とするから。

Hurtig, K.[2009] “Why Internalists about Reasons should be Humeans about Motivation,” in *Hume on Motivation and Virtue*, ed. by Pigden, C. R., Palgrave Macmillan.

・ウィリアムズは、信念が主観的動機群のメンバーでありえることを認める。そして理由に関する内在主義(=ウィリアムズ)は、信念が動機づけうるという考え=動機づけに関する認知主義と両立すると主張。

・しかし、Hurtig によると、理由に関する内在主義者は、理由の主観的動機群に信念が入り込むことを認めることができない。よって、理由に関する内在主義は、主観的動機群について「非認知主義」でなければならない。つまり、理由に関する内在主義は、動機づけに関する非認知主義(=ヒューミアニズム)としか両立しえない。よって認知主義的な動機づけの内在主義は妥当でないと批判。

※ ただし、Hurtig はそもそも、動機づけに関するヒューミアニズムが偽であると考えており、それゆえヒューミアニズムに依存する理由に関する内在主義も斥けられるべきと考えている(これについて今回は触れられない)。

【ウィリアムズの、実践的理由に関する内在主義】

X が Γ (=人物)の「主観的動機群」の中の何かと関係していないのであれば、X は、 Γ が ϕ するための理由になりえない。

ウィリアムズによる、動機づけ内在主義の認知主義バージョン

《特定の考慮が特定の仕方で行為するための理由であると信じていること》は、行為の動機づけを提供する、つまり実際に行為の動機づけの構成要素なのだろうか？...そうだと仮定しよう、少なくとも、そのような信念と行為に向かう気質との間の結びつきが、アクラシアを排除するほどの不要な程度にまできつく結ばれているのでない限り、この主張は実際のところもっともらしく見える[弱い内在主義?]。その主張は実際のところ、極めてもっともらしいので、この行為者はこの信念を持つことで、次のような人物であるように思える。すなわち、その人物について内的な理由言明がなされることこそ真でありうるような人物であるように思える。つまり、その人物は自分の[主観的動機づけ状態]S の中に、相応しい動機づけをもつ人物である。
(Williams[1981]p.108)

これを、動機づけの認知主義的内在主義[CMI]と呼ぶことにする。

CMI は、一見すると、確かに動機づけに関する標準的な非認知主義的[ヒューム主義的]理論(以下の H)と両立しない。

H：信念は、それ自体で行為者を動機づけることができない。行為者の信念が何らかの相応しい欲求に伴われる場合に限り、その人は行為するよう動機づけられる。

よって、ウィリアムズの内在主義は認知主義と両立するように見える。

異論

ウィリアムズの説明では、行為者が関連する気質 *disposition* を持っているということが、その行為者が動機づけ信念を持つための必要条件。でも、行為者の信念それ自体では動機づけえず、したがって関連する気質の助けが必要ということになれば、この気質は非認知主義的な響きを持つから、認知主義にならないのではないか。[しかも「動機づけには気質の助けが必要」という点は外在主義？]

応答

認知主義者は、《信念がそれ自体で動機づけることができない》ということを認めることができる。この場合、《その信念が、関連する気質の助けを借りて動機づけを行なう》と論じられる。そう論じるからといって、この気質が欲求として理解される必要はない (Parfit[1997], Broome[1997])。道徳的に行為するような気質を持つことは、合理的であることの一構成要素であるという哲学者もいる (Scanlon[1998])

以上から、理由に関する信念は、動機づけの力を(気質の助けを借りるとはいえ)持ちうるので、信念は、行為者の主観的動機群のメンバーでありうることになる。そして信念が行為者の動機群のメンバーであるなら、この動機づける信念もまた、行為者に、行為のための理由を与えることができる。

【オーウェン・ウィングレーブの場合】

前提 NRFFB：偽なる信念から結果する動機づけは理由を生み出しえない。

ケース 1：

(a)オーウェンは、《家族のしきたりが、自分を軍隊に入らせるよう命じているということが、自分に軍隊に入る理由を与えている》と信じている。

(b)オーウェンの信念 1(a)は、彼を軍隊に入らうよう動機づける。

それゆえ、CMI に従うと、

(c)オーウェンは軍隊に入る理由を持つ。

ケース 2 :

(a) オーウェンは、《家族のしきたりが、自分を軍隊に入らせるよう命じているということが、自分に軍隊に入る理由を与えている》と信じている。

(b) オーウェンの信念 2(a)は、彼を軍隊に入るよう動機づけない。

それゆえ、CMI に従うと、

(c)オーウェンは軍隊に入る理由を持たない。

ケース 1

1(c)が真なら、オーウェンの信念 1(a)も真。

∴オーウェンの信念が彼を動機づけているから。

ケース 2

2(c)が真なら、オーウェンの信念 2(a)は偽。

∴オーウェンの信念が彼を動機づけ損なっているから。

ウィリアムズと CMI が正しいとすると次のようになる。

「行為者の関連する事実に信念が正しいとき、その行為者がもつ理由に関する信念が真であるのは、その信念が彼を動機づける場合であり、動機づけるがゆえに真である。逆に偽であるのは、動機づけそこなう場合であり、動機づけそこなうがゆえに偽である」

TMoNB : 規範的信念が動機づけを結果することは、その信念を真にする。

信念が真 → 理由をもつ ← 動機づけているから

信念が偽 → 理由をもたない ← 動機づけていないから

ケース 3

(a) オーウェンは、《家族のしきたりが自分を軍隊に入らせるよう命じているということが、自分の動機づけ状態[欲求など]とは独立に、自分に軍隊に入る理由を与えている》と信じている。

(b) オーウェンの信念 3(a)は、彼を軍隊に入るよう動機づける。

それゆえ、CMI に従うと、

(c)オーウェンは軍隊に入る理由を持つ。

この場合、3(c)が真なら、NRFFB を前提すると信念 3(a)は真となる。

とすると「オーウェンが、自分の動機づけ状態とは独立に軍隊に入る理由をもつ」ということが真になるが、これはすなわち**外在主義**。

もし CMI が 3(b)のあらを探すことができないのであれば、3(a)は外在主義的コミットメントを示すものだから、3(a)は偽となる。それゆえ、オーウェンは、自分の規範的信念が偽であるとしても、その信念によって動機づけられることになり、彼がその信念によって動機づけられているからといって、その信念が真になりはしない。

⇒ TMoNB が斥けられる。

・では、CMI は、TMoNB を諦めたまま自説を維持できるか？

・無理に思える。TMoNB を諦めてしまうと、なぜオーウェンがケース 1 の場合に軍隊に入る理由をもち、ケース 2 の場合には持たないのかを説明できなくなる。

⇒ CMI にとって TMoNB は、必要不可欠な原理。

【結論】

一般に、「p は A に ϕ する理由を与える」という形式の命題は、外在主義的な理由言明として解釈されねばならない。したがって、内在主義者はウィリアムズの提案を斥け、ヒューミアニズム[**この場合は、非認知主義という意味**]と手を組まねばならない。

コメント

・ウィリアムズ自身は、自説を「準ヒューム主義 sub-Humean」と呼んでいる(Williams[1981])にもかかわらず、ハーティクは「ヒューム主義」を、ウィリアムズのそれとは違った意味、つまり普通に言われるところの「非認知主義」という意味で定義した上で議論を展開しており、ズレが生じている。

・本稿 p.17「応答」の箇所が変。ウィリアムズは、信念の中に欲求が入っていると考える「信念内在主義」(Williams[1981]pp.101-2, Cf. 奥田[2009])

Sandis, C. [2009] “Hume and the Debate on ‘Motivation Reasons,’” in *Hume on Motivation and Virtue*, ed. by Pigden, C. R., Palgrave Macmillan.

・現在のメタ倫理学におけるヒューム主義的動機づけ議論とは、行為の理由についてのもの。しかし、ヒュームの中に「動機づけの理由」なるものは存在しない。

動機づけの議論マップ

ヒューミアニズム：

我々を行為へと動機づける理由は、欲求と信念によって構成される。

支持者：Mele[1992], Smith[1994], Lenman[1996].

アンタイヒューミアニズム：

我々を行為へと動機づける理由は、信念によって構成されていれば十分である need only [他の要素が混じっていてもよい?].

Nagel[1970], Foot[1972b], McDowell[1978&1979], McNoughton[1988].

ピュアアンタイヒューミアニズム：

我々を行為へと動機づける理由は、信念によって混じりけなく purely 構成される。

支持者：Parfit[1997], Dancy[1993&2000].

心理主義：

我々を行為へと動機づける理由は、心理学的に実在し、それゆえ、規範的理由といった真理、事実、事態、ないし命題として捉えられるものとは完全に異なる存在論的カテゴリーに属する。

支持者：Nagel[1970], Mele[1992], Smith[1994], Brink[1997].

非心理主義：

我々を行為へと動機づける理由は、心理学的に実在せず、むしろ、規範的理由と同じ存在論的カテゴリーに属する。

支持者：Dancy[1995&2000], Collins[1997].

この見解をほのめかしているのが、Williams[1980], Nagel[1997].

この見解に接続されている規範的理由に関する非心理主義は、Broome[1997], Raz[1986], Scanlon[1999], Dancy[2000], Quinn[1993]によって擁護されている。

以上のマップで共通に想定されているのは、「我々を動機づけるものは、我々がそう行為する際の理由であるという見解」。

共通の見解(CV) : TOM とは、我々が行為するための理由についての理論である。

ヒュームは、CV を受け容れないがゆえに、TOM 内部での二つの上述の議論のどちらにも参加することができない。

【ヒュームにおける reason と影響】

- ・「いかなる信念も単独では動機づけえない」とはされていない。
- ・理性に由来する信念だけが、単独では情念や行為には影響を及ぼしえないと解釈可能。
- ・ヒュームにとっての信念は、すべて感情[?]であり、そのうちのいくつかは、《理性のみ》に由来し、いくつかは、《他の感情と結びついた理性》に由来する。

ところで、T 3.1.1.6; SBN457 の文章は普通、道徳における非認知主義を支持する議論として解釈されている。つまり、「道徳判断とは、信念ではなく欲求の表出」

しかし、ヒュームは信念が情念や行為を引き起こしうることを認めている。したがって、道徳判断がそれ自体で情念に影響を及ぼしうるので、**道徳判断は認知的でありうる**。

⇒Pigden[2009]に近い。

(P1)道徳判断は単独で動機づけうる

(P2)理性由来の信念は単独で行為を生みえない

(C)道徳判断は理性のみに由来するものではない

この三段論法から非認知主義は出てこない。

【純粹理性の実践性について】

ヒュームによれば、目的手段推理によって生じる仮言命法でさえ、我々に道具的理由を与えることができない(Korsgaard[1986&1997a], Millgram[1995], Hampton[1995])。

理性が唯一告げることができるのは、あなたの欲求を満たすためにあなたが行為すべきものについてのみ。その欲求を満たすべきかどうかについて、理性は沈黙したまま。かくして実践的推理とは、目的-手段推理[でしかない]ということになる。

そこで、「実践理性は、目的-手段関係を超え出ない」という見解を、規範的理由に関するヒュームの錯誤理論と呼ぶことにする。これが意味しているのは、「**X が行為のためのものともな理由だという判断は、理性のみからは引き出されえない**」ということ。

したがって、いかなる判断も、その理由を与える能力のみによっては、われわれを行為へと動かすことはできない。なぜなら、そのような能力は錯覚だから。

⇒ 我々の行為が理由によって生み出されることはない。

反論

しかしヒュームは、「道徳判断とは実践的なものであり、道徳判断が我々を行為へと動かすことが可能」と考えている。これは、上の議論と矛盾するのでは？

応答

上の議論でヒュームが斥けているのは、理性による動機づけの話。反論で言われているヒュームの主張は、ヒュームなりの仕方で規範的理由を再定義する上での枕となるもの。

⇒ ヒュームは**自然化された理由に関する実在論**を主張している。つまり、我々の判断を生み出すのは理性ではなく、人間本性である、つまり感情、習慣、本能、そして他の気質のために判断が生み出されるとヒュームは主張している。

結論

ヒュームは、冒頭で説明したマップのうち、弱いアンタイヒューミアニズムにもっとも近い。なぜなら、ヒュームはいくつかの信念が、それ自体で動機づけうるということを認めるから。とはいえ、行為に影響を及ぼす理由が存在することを否定するとき、ヒュームはCVを斥けている。

コメント

- ・ ヒュームが CV を斥けていることを示したら何が嬉しいのか、いまいちわからなかった...
- ・ 結論後半部分で、CV を理由に生じる心理主義 vs. 非心理主義、ヒューミアン vs. アンタイヒューミアンの議論は、CV という前提を取り払うことで同調しうるし、そうすることが規範的理由について考察する上で自然、と言われているがそのウマミがいまいちわからない...

Karlsson, M. M., [2006] “Reason, Passion, and the influencing Motives of Will,” in *Blackwell guide to Hume’s Treatise*, ed. by Traiger, S., Blackwell Publishing pp. 246-52

ヒュームの動機づけについての説明は有名だが、多くの論者が、特定の重要な側面で、その説明が実際にはヒュームのものではないと述べてきた (Kydd[1946], Ardal[1966], Norton[1982], Baier[1991], Radcliffe[1999], Karlsson[2000, 2001])。私もそれについて言及するときには、「ヒューム主義的 Humean」と鍵カッコ付きで示すことにする。

ヒュームが実際に主張しているのは、判断と情念が、別種の存在であるということ、及び判断単独では、つまり情念・欲求の影響がないならば、我々を行為へと動かすことはできないということ。これに基づいてヒュームは、道徳が理性のみに基づくことはありえないと主張する。

「ヒューム主義 Humean」の中にあってヒューミアンでないもの：

《何らかの対象への欲求》を《動機づけプロセスにおけるスタート地点》として、あるいは《そのスタート地点の本質的な構成要素》として説明すること。

図 1 「ヒューム主義」モデル：第一公式

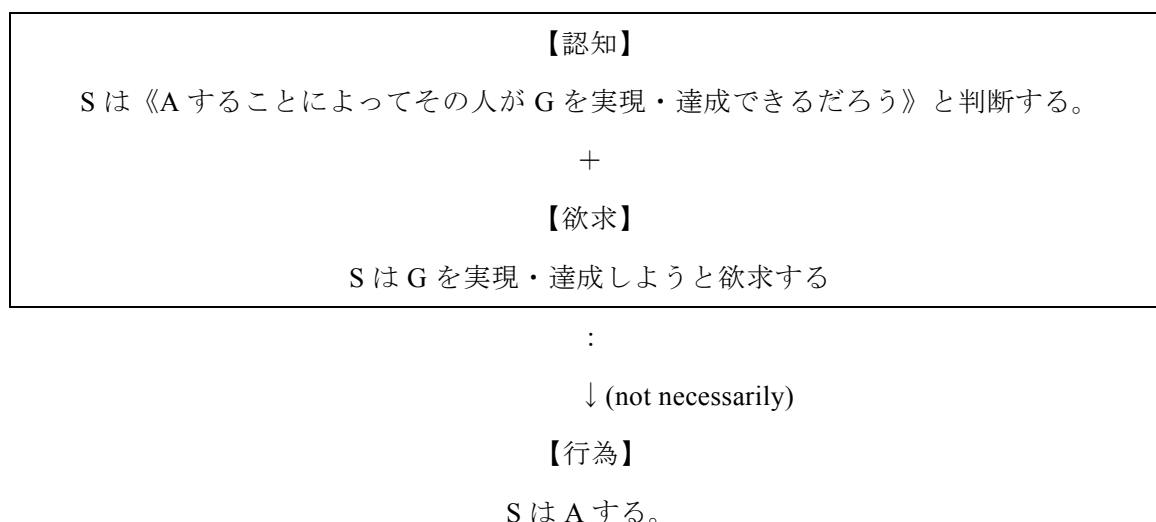


図 1 のモデルにある難点。「ヒューム主義」論者が、《S が A することは、S が A することを望んでいる・欲していることと因果的に結びついているだろう》と考えねばならないの

は確実である。しかし、これまでのところ、《A したいという欲求》は、そのモデルのどこにも組み入れられていない。⇒解消法は二つ。

[1]ボックスの中に、A することの欲求を入れ込む。(ネーゲルが言うところの、手段と目的関係における動機づけ影響力の伝染 transmission)

図 2 「ヒューム主義」モデル：第一案

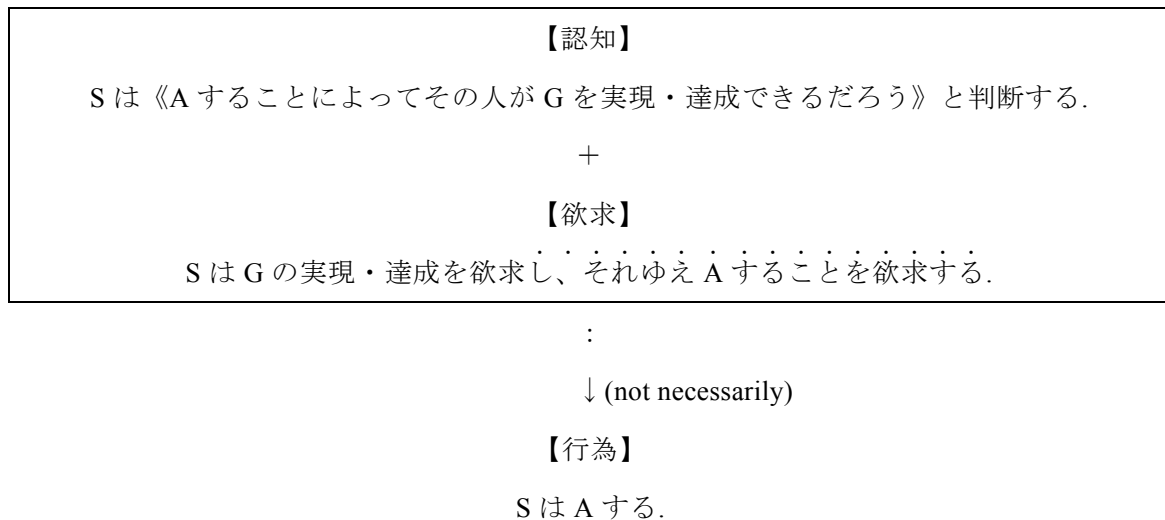
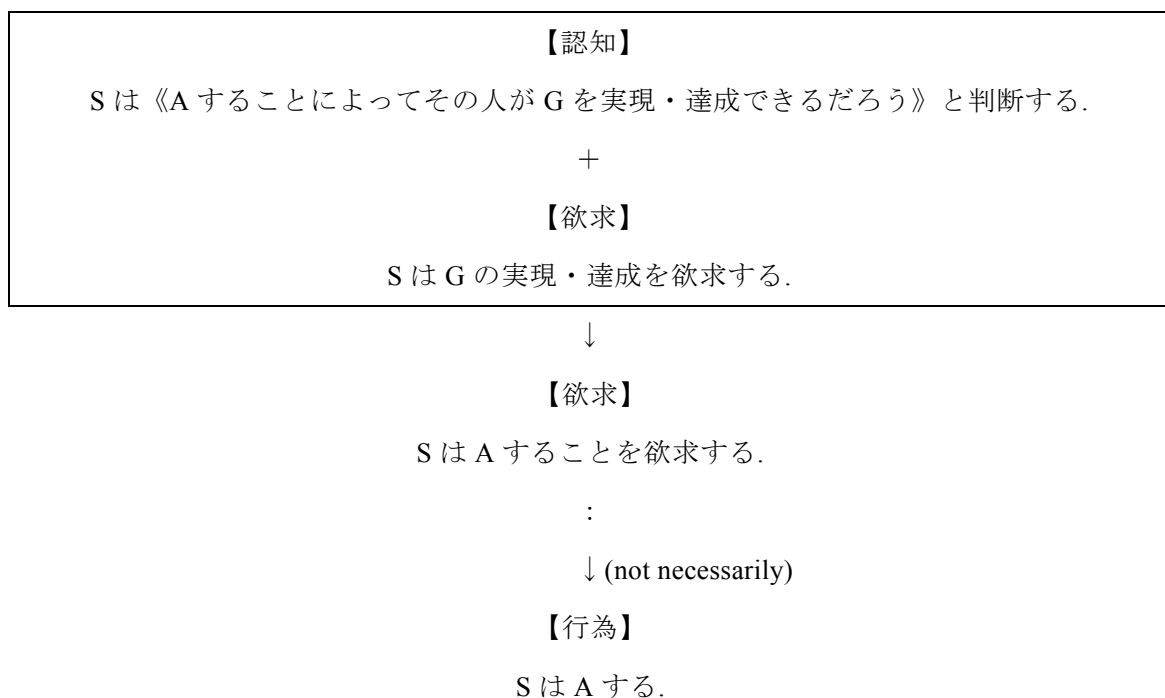


図 3 「ヒューム主義」モデル：第二案



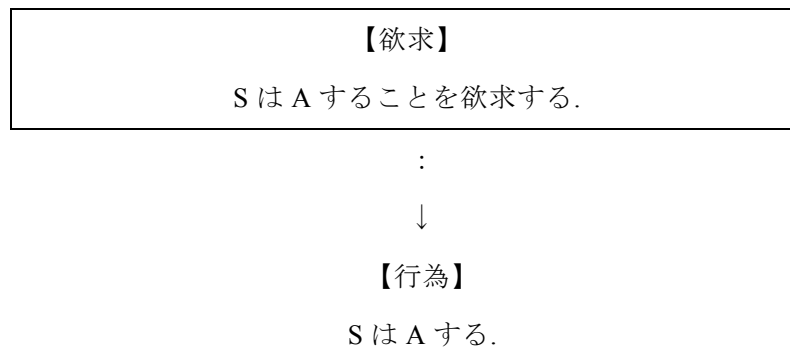
[2]Box の外へ A することの欲求を出す。

Box の外にそれを出すことの意義は、この欲求が、G を実現したいという S の欲求とは別個のものであり、動機づけプロセスにおいてこの欲求が、S の欲求に依存しているということを示すこと。

上記の図式に対する異論

A することへの S の欲求の方が、Box 中の項目よりも動機づけにとって近い位置にあることを考えると、なぜ我々は自分たちの動機づけの話をするにあたり、Box 中のことに言及する必要があるのか？なぜヒューム主義モデルに同意する感情主義者は、以下のミニマリストモデルだけでは満足しないのか？

図 4 ミニマリストモデル



Box 中の項目について言及する必要はある。欲求それ自体は説明されることが不可能なもの。だが、「ヒューム主義的」見解は、A することへの S の欲求が、S の理由という観点から説明されることを必要とする。A することへの S の欲求は、《別の欲求》と《その欲求に関連する目的手段関係についての判断》とに由来すると説明される。つまり、図 3 の Box 内の項目は、S が A することを欲求するための理由を構成している。もちろん、S's desire to realize or achieve G は説明不可能だが、少なくとも S's desire to do A は説明可能。

ではなぜ、A することへの S の欲求の説明に努めなければならないのか？

それは、道徳哲学における動機づけモデルは、《行為 A をするための行為者の動機》を、《A をするためのその行為者の理由》と結びつける必要があるから。これは、ヒュームが共有し、また我々のほとんどがおそらくは共有している理解。

※これに反対するのが、Sandis[2009]と Finlay[2009]

図 5 認知主義モデル(マクダウェルモデル)

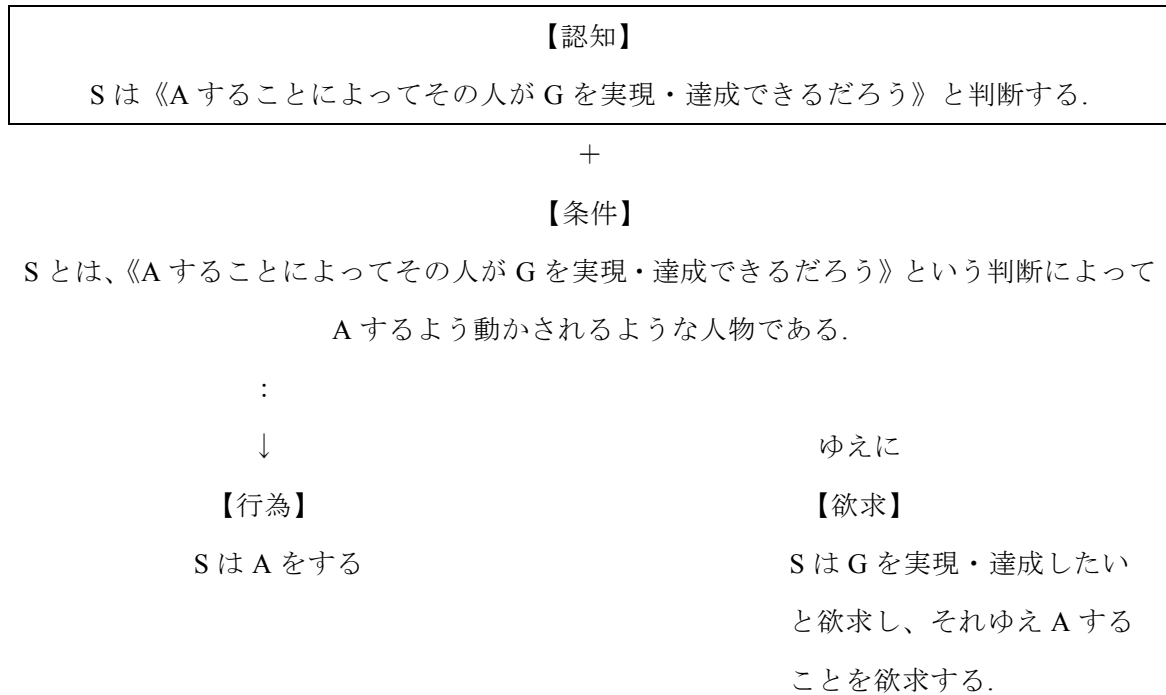
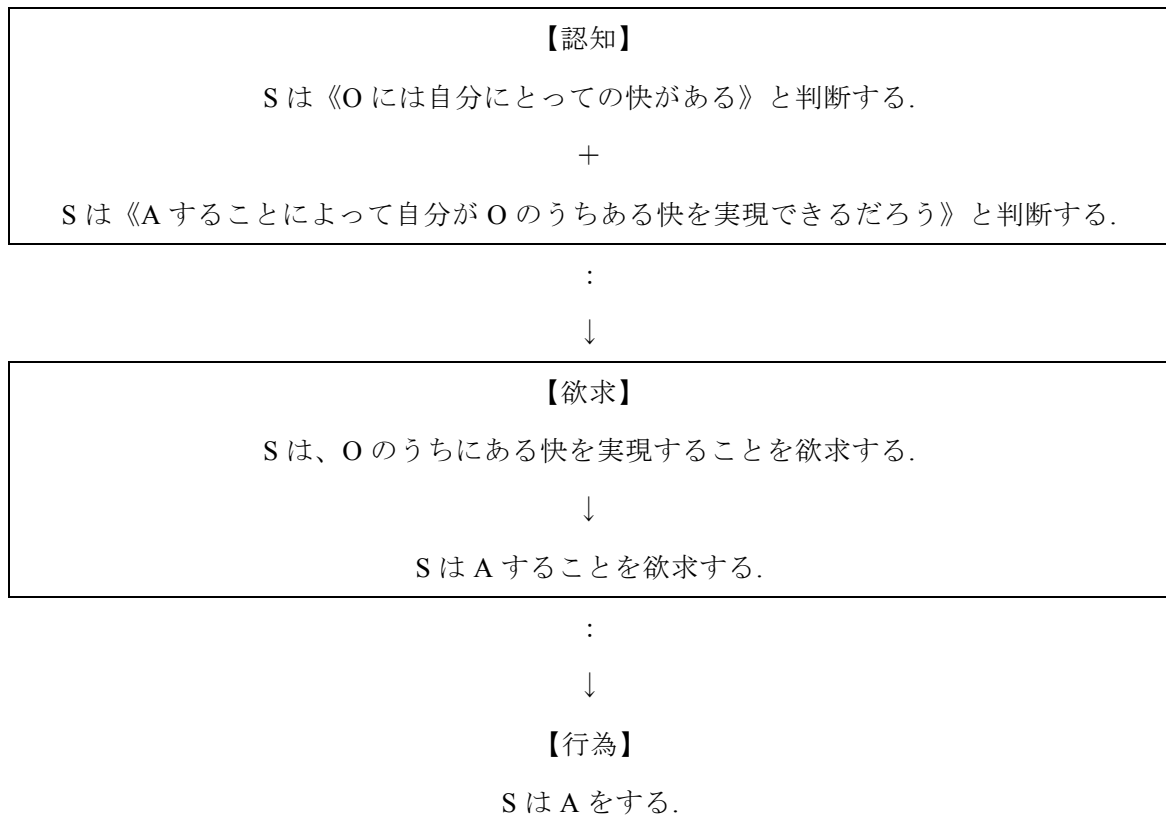


図 6 ヒュームのモデル(サイコロジカルヘドニズム)



この説明において、動機づけのスタート地点は認知である。この認知は、ヒュームの言葉では理性が作り出したもの **creatures of reason** であり、真偽が可能。

この認知は、理性が作り出したものであるがゆえに、おそらく「不活性」。

だが、ヒュームが《この認知が、欲求を形成するよう我々を仕向ける》と考えているのは明らか。理性の不活性を強調しすぎるのはヒューム解釈として問題！

(同 Pigden[2009], Sandis[2009].)

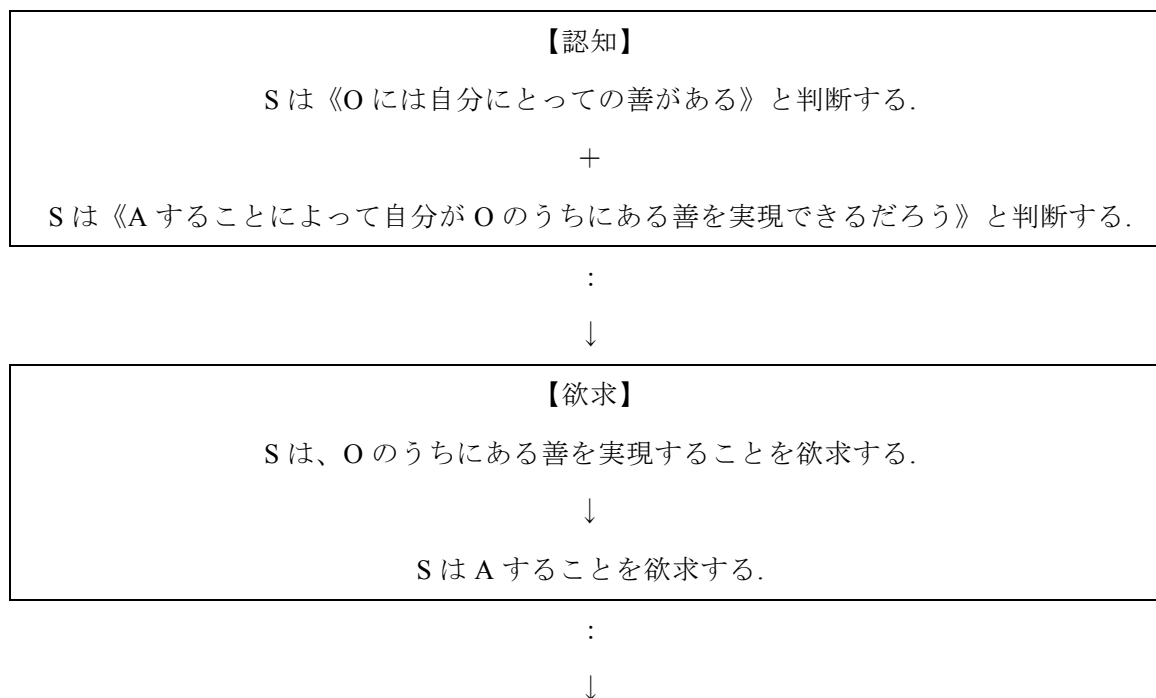
よって、認知はある重要な意味で活動的であることになる。理性が不活性で不活動と主張されるにしても、ヒュームは理性の因果的影響について詳しく述べている。

※この証拠として持ち出される箇所は T 3.1.1.12; SBN459 ← しかし、この箇所で説明されている認知は、すでに存在している欲求や情念を指図するものであって、新しく欲求や情念を生み出すものではないので、証拠として妥当でない？

とはいえ、ヒュームが行為への動機として特定するであろうものは、そのような認知によって「引き起こされる」情念—特に欲求—である。

結局、(快と善との同一視を想定することで)上の Box の中の項目(行為者の理由)は、下の Box の中の項目(行為者の動機)を正当化する。それは、このようにして動機付けられる行為を正当化することと同じである。

図 7 ヒューミッシュ マスターモデル Hume-ish master model



【行為】

S は A をする.

ヒュームの動機づけに関する説明が、ヒューム主義モデルや認知主義モデルより優れている理由

[1] 行為の理由[認知]と、行為の動機[欲求]とを明確に区別する.

理由は、その行為を正当化する役割を担い、動機はその行為を引き起こす役割を担う。この二つは少なくとも、分析を行なう上で区別されねばならず、ヒュームの説明ではそれらは存在論的に別個であるがゆえに、それらの分析上の区別は保証される。

[2] 行為の理由についてのヒュームの説明は、他の理論のものよりもっともらしい.

「ヒューム主義」：行為の理由の本質＝「行為者があるものを欲しているということ」

⇒ ある人があるものを単に欲しているということだけでは、それを追求するに値するものとはならない！(by マクダウェル)

⇒ マクダウェルらの認知主義も、「行為者の理由が、その人が善であると考えたものとどのように結びついているのか」ということを示し損なっている。

⇒ ヒューミッシュモデル：行為の理由は、その人が、その行為がある善を実現するだろうと考えていること

[3] 行為の理由と、行為者の動機との間の関係について、明確な図式が提出されている.

[4] カント主義的アプローチは動機づけに関して、道徳の場合を特別なケースとするが、ヒュームは動機づけに関して、道徳の場合・道徳に関わらない場合を一貫した説明で済ませることができる。

コメント

・ヒューミッシュマスターモデル(図 7)が、他のモデルよりもっともらしい動機づけモデルだと言われている。だが、本稿 pp.28-9 の図において明らかなように、カールソンは認知と欲求のどちらにも、内容 content を認めているように見える。しかも、認知と欲求との間の関係が「+(助けを借りる)」ではなく、「↓(引き起こす)」で結ばれているため、もはや認知と欲求とを分ける意味がなくなっている(この問題意識は、打ち合わせに参加していた佐々木氏によるものである)。図 6 に描かれるヒュームモデルもそうだが、ヒューム自身、「欲求」に「内容」を認めるのかどうか、「欲求」は内容を持つものとして分析可能なのかどうかは論点と言える。マイケル・スミスが欲求に関して、欲求それ自体合理的な批判を免れないという点で「反ヒューム主義」を掲げるように、欲求をヒュームとは異なるものとして解釈する方がよいという意見もあろう。

まとめ

◆ミルグラム

実践的推理において理性は、目的-手段関係を推理するための道具であるという見解がヒューム由来とされる。**ヒューム主義＝実践的推理に関する道具主義**

◆ピグデン

スミスを始め、一般に、**ヒューム主義＝非認知主義 & 動機づけの内在主義**。

ピグデン自身は、ヒュームを準-ハチスン主義&動機づけの外在主義と解釈。

◆スミス

ヒューム主義＝非認知主義 & 判断の内在主義、信念-欲求理論

◆ハーティク

ヒューム主義＝動機づけに関する非認知主義(動機づけの役割を担うものは感情・情念のカテゴリーに入るもののみ)

◆サンディス

ヒューミアニズム：

我々を行為へと動機づける理由は、欲求と信念によって構成される。

アンタイヒューミアニズム：

我々を行為へと動機づける理由は、信念によって構成されていれば十分である。

◆カールソン

- ・ヒュームが実際に主張していること

[1]信念-欲求理論：判断と情念は別種の存在である

[2]理性は情念の奴隷議論：判断単独では、つまり情念すなわち欲求の影響がないならば、我々を行為へと動かすことはできない。

- ・一貫してヒュームの動機づけモデルを、「判断の外在主義」として解釈。

- ・ただ、認知 Box の中身の働きを、行為の正当化の役割を果たすものとして解釈しており、これがヒュームのモデルとして適切かどうかは検討が必要。

総括

[2] **認知主義/非認知主義**

- ・メタ倫理学では、一般に、ヒューム＝非認知主義として捉えられている。
- ・ヒューム＝認知主義的に捉えようとする論者もいる。

この場合、(道徳的)信念が情念・欲求を引き起こしうるという意味で「認知主義」

この「認知主義」は、道徳判断のみに関する(動機づけに関する言及をしない)広い意味での「認知主義」とは異なる。

⇒ **認知主義/非認知主義の意味内容次第で、どうとでも採れる…**

[1] **動機づけ**

・ヒュームの動機づけ議論は、内在主義・外在主義のどちらの解釈もある。どの場合にしても、最終的に行為者を動機づけるものは「欲求」とする点で一致。

・しかし、「信念が理性に由来する」「信念が印象に基づいている」「信念が情念を引き起こす」などの傍点部分の意味していることが、論者によって様々かつ不明瞭。そもそもヒュームもそのような言葉遣いをするが、その内実が不明(解釈を要する)...

・信念-欲求理論ということで、「信念と呼ばれるものと欲求と呼ばれるものが別種の存在である」、あるいは「そのような二種類のカテゴリーがある」というところまではヒューム解釈として正しいし、メタ倫理学もきちんと踏襲(これくらいしか共通に理解されている箇所はない...?)。

・だが、**信念と欲求との間の関係性**について、ヒューム研究においても、メタ倫理学においても、解釈が定まっていないことが「ヒューム主義」の意味がぼやけることの最大の理由???

(道具的/理性的)信念 + 欲求 ⇒ 行為 ?

(道具的/理性的)信念 → 欲求 ⇒ 行為 ?

(道徳的/情念的)信念 → 欲求 ⇒ 行為 ?

◆そもそも《通常の動機づけ》と《道徳的動機づけ》とを同じシステムで捉えるのか？カントは道徳の場合を特別視したわけだが、ヒュームも同じ？ヒューム主義も同じ？

◆理性-情念の区分と、信念-欲求の区分をあまりにパラレルに考えすぎ？

◆現代のメタ倫理学に特徴的と思われる「(行為の)理由」の扱いを、ヒューム研究としてどうするかが問題？

【ヒュームにおける動機づけメカニズムについての暫定的アイデア by 林】

理性的 直観的信念	+ 欲求				T 2.3.3 / T 3.1.1.9
	理性的 道具的信念	+ 欲求			T 2.3.3 / T 3.1.1.9
	感覚印象 ⇒	快苦的 非-道徳的信念	⇒ 欲求		T 1.3.10
		反省印象 ⇒	快苦的 道徳的信念	⇒ 欲求	
				間接情念 道徳感情	⇒ 欲求
					直接情念 欲求

※このメカニズムについては、網羅しきれていないという点をはじめ、大いに問題があります。

Bibliography

- 大庭健 編[2006]『現代倫理学事典』弘文堂
- 奥田太郎[2004] “マイケル・スミスのヒューム主義とヒューム道徳哲学の比較検討の試み”『実践哲学研究』第 27 号、実践哲学研究会、pp.1-28
- [2009] “現代倫理学における「ヒューム主義」の系譜と起源” 日本イギリス哲学会関西部会報告(未刊行)
- 林 誓雄[2009] “ヒュームにおける道徳感情と道徳的な行為の動機づけ”『倫理学年報』第 58 号、日本倫理学会、pp.93-107
- Botros, S. [2006] *Hume, Reason and Morality A legacy of contradiction*, Routledge.
- Cohon, R. [2008] *Hume's Morality*, Oxford University Press.
- Darwall, S.[1995] *The British moralists and the internal 'ought':1640-1740*, Cambridge: Cambridge University Press
- Karlsson, M. M. [2006] “Reason, Passion, and the Influencing Motives of the Will”, in *Blackwell guide to Hume's Treatise*, ed. by Traiger, S., Blackwell Publishing pp. 246-52
- Millgram, E. [1995] “Was Hume a Humean?,” in *Hume Studies*, Vol. XXI, No.1, pp.75-93
- Pigden, C. R. [2009] *Hume on Motivation and Virtue*, Palgrave Macmillan.
- Schroeder, M. [2007] *Slaves of the Passions*, Oxford University Press
- Smith, M. [1994] *The Moral Problem*, Blackwell.